

メコンデルタ伝統民家の 特質と現在

ーティエンザン省カイベーの調査2ー

はじめに 奈良文化財研究所では文化庁の要請を受け、ベトナム北部ハタイ省ドゥオンラム村、中部トゥアティエン・フエ省フォックティック村、南部ドンナイ省フーホイ村に引き続き、メコンデルタに所在するティエンザン省カイベーの調査活動をおこなった。調査の概要は本紀要「メコンデルタ伝統的集落の特質と現在」(p.30)に譲り、本稿では調査で確認できた民家について、その特徴を過去の調査であきらかになった他地域の特徴と比較しつつ報告する。

敷地の構成 伝統集落における敷地の構成は、北部ドゥオンラム村では、稠密で建物の壁や塀で隣家と接しつつ区切られ、中部フォックティック村では生垣で敷地を囲み、同じく生垣でアプローチを設けて障壁や水盤を備えるなど、緩やかながら明確に敷地の構えを整えつつ区切っていた。カイベーの敷地構成は、屋敷林状に建物周囲に樹木を配したり、近年設置したとみられるフェンスなどがあるが、南部フーホイ村と同様に定型的な敷地境界を示す要素は不明確で、比較的開放性に富んでいるといえる。またカイベーでは、川や運河に面した主屋の背後には、果樹園などの広大な敷地が広がることが多く、宅地と農地が離れたドゥオンラム村・フォックティック村はもちろんのこと、フーホイ村とも異なる様相を示す。しかし、近年には敷地の細分化が進行したとみられ、フーホイ村に類似した敷地構成になりつつある地区も確認できる。

敷地内には主屋のほか、炊事棟、天神を祀る供物台、家畜・農作業小屋などがある。供物台は主屋正面に設けられる広場の、主屋真正面の位置に配される。炊事棟は

主屋の横に並んだ位置、もしくは背面側に軒を接して建て、樋を渡して雨仕舞とする。これらの構成はフーホイ村と共通し、ベトナム南部民家の特徴といえる。

カイベーにおける民家の諸相 主屋は平入で、桁行(間口)3間切妻造瓦葺のもの、桁行5間入母屋造瓦葺のものが一般的である(巻頭図版2)。梁行(奥行)は5間前後が基本であり、正面奥行1間通りを吹放しの柱廊空間とする。この柱廊空間は正面だけでなく、側面や背面にも設ける例も確認できる。外壁は近年のレンガ壁もあるが、板壁が一般的で、竹を割って編み込んだ壁も確認できる。柱廊空間や壁の様相は、レンガ壁に囲まれる北部民家に比べると、敷地と同様に開放性を示すといえよう。

内部は胴張り円柱もしくは角柱を用いた総柱式の柱配置が基本であり、横架材によって柱を省略する事例は比較的新しい建築年代である。間取りは前後に区切って前面側中央に先祖壇を祀るが、先祖壇部分のみ奥深くするため、前面側は凸字形の平面となる。先祖壇廻りには彫刻欄間などで構えを整え、先祖壇背面側の空間は寝室や物置として使用する。ここまでは、フーホイ村民家と共通するベトナム南部民家の特徴といえる点である。

フーホイ村と様相の異なる点は、まず1つに構造形式が挙げられる。フーホイ村では棟持柱形式の民家と、身舎柱間に指梁を架けて棟束を立てる形式(以下、棟束形式)が、およそ半数ずつ確認されていた。また、これまでの調査でもあきらかなように、北部や中部の民家では棟持柱形式がほとんど存在しない。そのため棟持柱形式は南部特有の構造形式と考えられてきたが、カイベーではほとんどが棟束形式であり(図35)、棟持柱形式は小規模な民家や水上家屋など簡易な構造の民家に確認できるとどまる。それでも、棟持柱形式が簡易な構造の民家に確



図35 先祖壇廻り彫刻と棟束形式の架構



図36 洋風意匠の民家

認できることは、それが南部の土着的な技術と考えることが可能であるが、カイバーでは上層民家での構造選択の傾向がフーホイ村と明確に異なる。

次に、カイバーでは伝統民家の正面構え（柱廊空間）に、洋風意匠を施す事例が多い（図36）。これまでの他地域の調査でも、正面構えをレンガ造にする場合には、陸屋根などの非伝統的の様式にする例があり、カイバーでも確認できる。これらの多くは1970年頃からの流行と考えられる。しかし、カイバーにはこれと異なり、20世紀前半以前に遡るとみられる本格的洋風意匠の事例が確認できる。また、柱廊空間からさらに内部へ、先祖壇前面の空間まで洋風に設える家も確認でき、これらは規模・装飾などを見ても特に最上級の民家に位置付けられる。

ヤシ葺家屋 メコンデルタの特徴的な家屋としては、水上家屋（杭上家屋）が既によく知られている。カイバーでも川や運河沿いに、ヤシ葺の小規模な水上家屋が確認でき、近年も建設されているようである（図37）。ヤシ葺の建物としては水辺以外にも散見でき、主屋から家畜小屋まで幅広い用途に使われているが、どちらかといえば簡易な建物といえる。今回の調査の限りでは、あきらかに近代的な様式のものを除くと、これらの建物は棟持柱形式の構造をとっており（図38）、この構造形式を南部の土着的な技術と捉える根拠の1つになるだろう。本来は構造形式のみならず、建物各所に伝統的な技術が見られたと考えられるが、工具や金具の普及により、徐々に近代的な構造・外観の建物に変わりつつある。もともと、この地域のヤシ葺建物は耐用年数がそれほど長くないため、建て替えることが前提といえる。そのためこの種の建物では、古い建物を保存することとは異なり、古い技術を保存活用していく必要がある。



図37 カイバーの水上家屋

建築年代と町並みの現状 調査対象となった民家の建築年代は、もっとも古いもので19世紀前半であり、19世紀に遡るものは2件であった（口伝による）。装飾的で規模の大きな民家は、いずれも柱を円柱としており、19世紀建築の民家はこれに含まれる。また、円柱を用いた民家は1960年頃まで建てられたとみられ、角柱を用いる民家は1940年頃から建てられ始め、1980年頃まで建てられたようである。1970年代からは片流れ屋根レンガ造民家が建てられ始め、近年は定型が見出しにくい現代住居が建てられている。それでも、カイバーの現代住居は自動車道路沿いに建てられており、運河を中心とした地区には及んでいないため、運河沿いの伝統的集落の建物や景観について維持されることが望まれる。

メコンデルタ伝統民家の歴史的背景 カイバーの民家は、特徴的にはベトナム南部の形式で、フーホイ村の民家と共通する点が多いが、装飾的で規模の大きい最上級の民家建築が比較的多いといえる。カイバーに比べると、フーホイ村は中級～上級の民家の集積が特徴的であり、逆にカイバーにはこのクラスの民家がやや少なく、小規模な民家と格差が大きかったとみられる。相違点には他にも前述のとおり、民家の構造形式の違いなどもある。これらは、フーホイ村と異なる様相である宅地と農地の関係などを手掛かりにすると、集落の成り立ちに由来すると考えられる。ベトナム南部の多くの越族集落は、北部・中部からの開拓によって成立しており、カイバーの建物の彫刻や家具なども、王宮が所在した中部からの行商や取り寄せによる。メコンデルタとその他のベトナム南部において、開拓にともなう集落形成と民家建築の成立過程に違いがないか、今後はさらに分析を進めていきたい。

（黒坂貴裕）

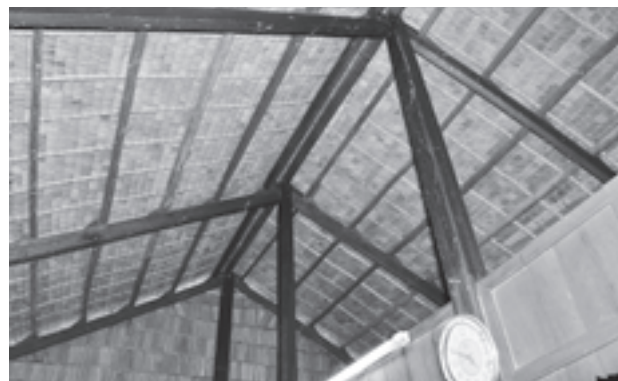


図38 ヤシ葺民家における棟持柱形式の架構